

山口県立萩美術館・浦上記念館

# H A G I |

HAGI URAGAMI MUSEUM MAGAZINE

# 萩

# 114

WINTER ISSUE  
2025



# 令和6年度の新収蔵作品について

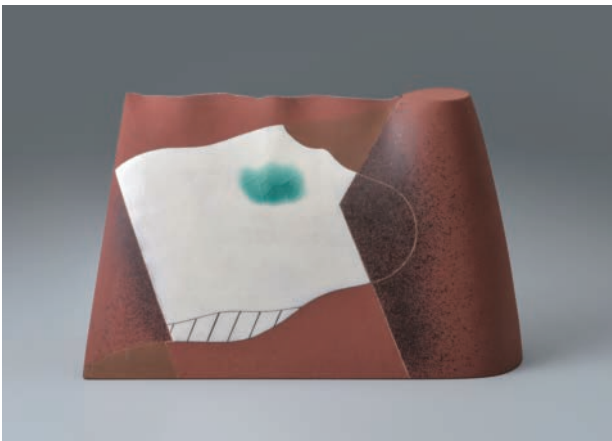
今年度の作品収集活動(作品の受贈)として、下表のとおり陶芸9件の作品を受贈しました。いずれの作品も今後の当館における展示をはじめとする美術館活動において有効に活用させていただく予定です。

このたびの作品収集にあたりまして、貴重な作品を御寄贈くださいました皆様をはじめ、お世話になりました関係各位に心よりお礼申し上げます。

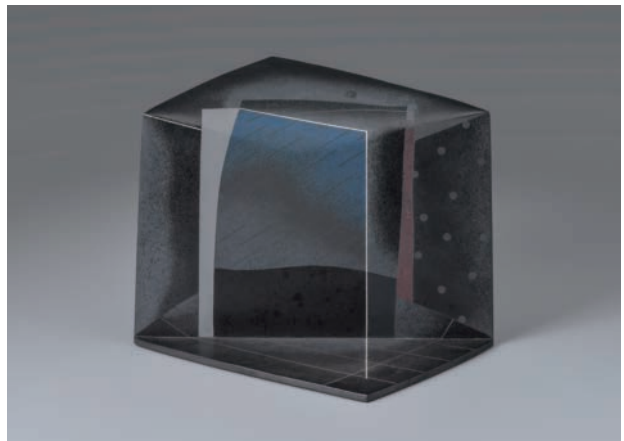
## 受贈作品一覧

番号	作品名	制作者	質料	制作年	制作地	寸法(cm)
1	白い膚	林 康夫	陶磁	1981年	日本	高23.1 幅37.2 奥13.8
2	Work 96-2	林 康夫	陶磁	1996年	日本	高28.2 幅38.9 奥41.6
3	寓舎「重い屋根」	林 康夫	陶磁	2006年	日本	高39.1 幅47.5 奥16.9
4	HU-151	井上雅之	陶磁	2015年	日本	高78.0 幅165.0 奥172.0
5	HU-152	井上雅之	陶磁	2015年	日本	高42.0 幅197.0 奥208.0
6	HU-153	井上雅之	陶磁・鉄	2015年	日本	高192.0 幅191.0 奥175.0
7	淡青釉鉢	岡田 泰	陶磁	2019年	日本	高26.5 幅(径)44.0
8	紅白鮮 斜陽-2209-	増原嘉央理	陶磁	2022年	日本	高32.0 幅(径)49.0
9	エル キャピタン	十三代 三輪休雪	陶磁	2022年	日本	高13.8 口径14.0×13.5

## 受贈作品



1. 林 康夫《白い膚》1981年



2. 林 康夫《Work 96-2》1996年



3.林 康夫《寓舎「重い屋根」》2006年



4.井上雅之《HU-151》2015年



5.井上雅之《HU-152》2015年



7.岡田 泰《淡青釉鉢》2019年



6.井上雅之《HU-153》2015年



8.増原嘉央理《紅白鮮 斜陽-2209-》2022年



9.十三代 三輪休雪《エル キャピタン》2022年



# 美人画の四季

女性を描いた近代版画を紹介

【会期】2024年7月9日(火) — 2025年4月13日(日)

第7期 2025年1月2日(木)～1月26日(日) 第8期 1月28日(火)～3月5日(水) 第9期 3月14日(金)～4月13日(日)

2024年7月から開催している本展では、明治中期以降の近代版画による美人画を紹介しています。第7期から第9期は、冬から春にかけての季節に合わせて選りすぐった作品をお楽しみいただけます。

※会期中に展示替えがあります。全9期に分けて3作品ずつ展示します。 ※本館の設備改修工事に伴い、会場は陶芸館となります。

## おすすめの一品

春

「今すがた」は明治39年(1906)から42年にかけて刊行された美人画のシリーズで、54図が確認されています。本シリーズを手掛けた山本昇雲(1870～1965)は、高知県に生まれ、明治19年(1886)に父母と共に大阪へ移って輸出用陶器の絵付職人となりました。その後東京へ出て、明治22年(1889)に南画家の瀧和亭に入門します。昇雲は、現在はあまり知られていない絵師ですが、明治22年(1889)に創刊された日本初のグラフ雑誌『風俗画報』(東陽堂刊)の口絵や挿絵(多色刷石版画)を担当し、報道画家として出版界で活躍したほか、日本画も積極的に描きました。「今すがた」シリーズは、浮世絵の流れを汲む多色摺木版によって制作されたもので、昇雲の代表作のひとつです。

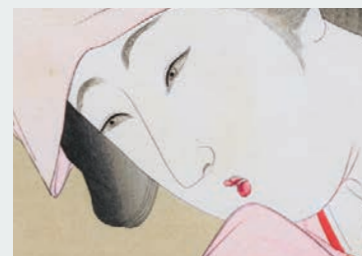
本作に描かれている女性は花嫁。揚帽子を被り、髪飾りのモチーフは鶴、亀、松、梅、扇と吉祥づくしです。画面構成の工夫によって、花嫁は画中の枠の中から前へ出てくるかのように見えます。くっきりとした二重瞼に豊かな睫毛、光を受けて輝く黒目が美しく、また、ふっくらとした唇の表現にも艶やかさが感じられます(図1)。

画面右上には、シリーズ名となる「今姿」と共に「高砂やこの浦舟に」と記されています(図2)。「帆を上げて、この浦舟に帆を上げて、月もろともに出で潮の、波の淡路の鳥影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住吉に着きにけり、はや住吉に着きにけり。」と続く、現在でも結婚式に欠かせない謡曲「高砂」の一部が本作の題名となっています。



第9期 3月14日(金)～4月13日(日)

山本昇雲「今姿 高砂や」  
大判錦絵、明治39年(1906)



(図1)

※婚礼そのものに季節はありませんが、謡曲「高砂」が早春の情景を表していることから、春としています。

(図2)

# 茶陶 萩

【会期】2025年1月2日(木) — 4月13日(日)

17世紀初頭、長州藩のもとでつくられはじめた萩焼。今日のこっている江戸時代の萩焼の数々のなかでも、茶碗をはじめとする茶の湯の道具（茶陶）は多く伝えられています。

萩焼の魅力は、たとえば「ざんぐり」といった言葉で形容されるような柔らかな質感でしょう。おもに山口県内で採れる見島土、金峯土、大道土の3種をブレンドしたものが知られ、砂粒が多く混じる目の粗い土や精製された肌理の細かい土があり、さらに色彩は濃い茶色、肌色、灰白色などさまざまです。

また、素地の上に掛けられる釉薬にも、古くより愛されてきた枇杷色や、やわらかい白色などいくつか種類があり、こうした釉薬と素地との組み合わせの幅広さが、萩焼のさまざまな魅力を生み出しているのです。

本展覧会では、萩の江戸時代から現代の茶陶を展示し、その多様性をご覧いただくとともに、萩の茶陶のうつりかわりを紹介します。



萩井戸形茶碗 江戸時代中期・17世紀後半～18世紀後半 当館蔵

## おすすめの一品

三輪壽雪(1910-2012)は、山口県阿武郡(現、萩市)にて長州藩御用窯を務めた三輪家九代雪堂の三男として生まれました。本名は節夫。同じく陶工の休和(十代休雪)を兄にもち、昭和42年(1967)に「十一代休雪」を襲名。昭和58年(1983)には、休和に続き2人目の重要無形文化財「萩焼」保持者(「人間国宝」)に認定されます。平成15年(2003)には長男龍作に代をゆずり、「壽雪」と号しました。

この作品は、しばしば木製品として目にする手桶の形を取り入れたやきものです。木製品からは感じることのできない重量感もさることながら、足元で露になる素地の質感は、やきものならではの土の迫力を感じさせます。また、休和とともに完成させた「休雪白」の純白が、黒味のある化粧土との組み合わせによってさらに引き立てられている点もまた、この作品の魅力といえるでしょう。素地と釉薬の絶妙な調和を楽しめる萩焼らしい作品となっています。



三輪壽雪《白萩手桶花入》 昭和40年(1965)  
当館蔵 撮影:宮野正喜

# 萩美百華

【会期】

2025年1月2日(木) — 4月13日(日)

「萩美百華」は、当館においては、いつもとは少し趣を変えた展覧会です。

たとえば同時開催の「茶陶 萩」は、萩焼の茶陶のみを展示し、じっくりと紹介するもの。一方、この「萩美百華」は中国、朝鮮、日本の古陶磁や、近現代の陶芸、山口県ゆかりの作家による硯、金工、漆芸といった工芸も含め、いろんなジャンルを横断し、作品をご覧ください。

もちろん、萩美の〈百華展〉ですから、当館が収蔵する、選りすぐりの作品を展示するのは当然のこと。選りすぐりの作品のなかでも特に、桜や牡丹、蘭、椿など、四季折々の〈花〉を一堂に展示し、それぞれの魅力を同時にご堪能いただける、軽やかで、華やかな展覧会になっています。

異なるジャンルの作品を一堂に展示することで、各作品がどのように花を表現しているか、それぞれの素材が花の装飾にどのように影響しているのか、また、作品の造形と花の装飾がどのように調和しているのか、比較することでわかる作品の魅力についても紹介します。



倅山美知子《菫箱「さくら」》 2016年  
当館蔵(倅山美知子氏寄贈) 撮影 山崎信一

## おすすめの一品

端正に成形された柿右衛門様式の八角形の鉢です。絵付けされる前の純白の素地は「乳白手(濁手)」と呼ばれており、この製法は江戸時代の延宝から元禄年間(1673~1704)にかけて完成しました。

余白を残した文様の描き方は柿右衛門様式の特徴で、ここでは朱に近い赤と黒で引かれた輪郭線の中を赤・緑・青・黄・金で塗り込める技法が見られ、粟、菊、桔梗と思われる秋草と二羽の鶉が、純白を背景に優美に浮かびあがっています。

雌雄を表現するかのように、鶉の羽は色分けされており、この2羽は、おそらくはつがいと考えられます。うつわの周囲には花をモチーフとした装飾がめぐらされ、描かれた光景を華やかに引き立てる一方、さらにその外側の端部にめぐらされた金属的で落ち着いた茶色の口錆がうつわ全体を引き締めています。



色絵粟鶉文八角鉢 日本・有田(柿右衛門様式)  
江戸時代・17世紀後半 当館蔵(松村實氏御遺族寄贈)



# 十二代坂倉新兵衛《萩刷毛目茶碗》1958年 三輪休和(十代三輪休雪)《萩編笠水指》1973年

今年度の季刊「萩」では、7月号から3回にわたって当館所蔵の萩焼を取り上げて、その歴史や魅力を紹介しています。1、2回目では江戸時代の萩焼について紹介しましたが、3回目となる今回は現代的な萩焼のはじまりに注目して、その先駆けとなった十二代坂倉新兵衛と三輪休和(十代三輪休雪)の作品を紹介します。

萩焼は生産が始まってから400年余りの長い歴史があり、今日も萩を中心として山口県内には多くの萩焼づくりにかかわる陶工や作家により、その伝統を継承しています。その現代の萩焼の礎を築いたのが、先に紹介した二人です。

十二代坂倉新兵衛(1881-1960)は、江戸時代の終焉とともに藩の庇護を失って以降、低調となった萩焼の再興に寄与した一人です。昭和初期におこった桃山陶器の復興により茶陶に注目が集まった機運をとらえ、時代に合った萩焼をつくりました。古作に倣い、伝統を尊重しながらも独創的な作品づくりを行ったのです。その作品のひとつ《萩刷毛目茶碗》(写真1)は、かつて茶陶が憧憬のものとして注目された桃山から江戸の表現に回帰し、伝統的な刷毛目の手法を装飾的に取り上げています。刷毛目は、萩焼の源流である朝鮮陶磁にはじまり、江戸時代を通して採用された、うつわを白く見せる白化粧の技法です。伝統的には、器面に白色の化粧土を刷毛で塗り込めるものがほとんどであり、本作品のように素地の色(濃い茶色)が見えるような刷毛の施し方には、作者独自の刷毛目の表現法が反映していると考えられます。この新しい刷毛目の使い方により、うつわのなかで対照的な色の配置が完成し、刷毛目が大変魅力的なものになっています。土と白化粧土、さらには透明の釉薬との調和により、刷毛目が見所となった作品です。

三輪休和(1895-1981)は長州藩御用窯のひとつ三輪家十代休雪を襲名し、1970年には重要無形文化財「萩焼」の保持者(「人間国宝」)に認定されます。休和の大きな仕事としては、「休雪白」の完成を挙げることができます。これは今では萩焼のイメージとして定着した純白の釉薬ですが、作者が研究のすえ、古来受け継いできた藁灰釉という白濁した釉薬を改良して生み出したものです。この純白の釉薬は三輪家当主が代々襲名する「休雪」という号から休雪白と呼ばれています。《萩編笠水指》(写真2)にもたっぷり休雪白がかかっていますが、流れるような施釉法からは休和独自の美的感覚がうかがえます。それは、流れている瞬間をとどめるような休雪白の様子と、それが作品の足元に向かって次第にあらわれてくる素地の赤味との対比により、各色彩が明確になって見ごたえのある景色をつくっています。釉薬の特性を熟知している作者だからこそできた表現と言えるでしょう。

これまで紹介した十二代坂倉新兵衛や三輪休和の仕事は、萩焼の新しい表現をつくり出した近代における革新的な出来事でした。革新を繰り返して受け継がれる伝統のなかで、このような営みは現在も多くの作家や陶工によって続けられています。機能性を持ちながらも装飾性に特化したもの、色彩豊かな色づかいのものなど、かつてよりもいろいろな萩焼を見ることができるようになりました。現代の人々に受け入れられるような感覚を反映したものは何か、また伝統を保持しながらその実現にはどのような素材や技法を取り入れていけば良いか、新しい表現への挑戦は現在も進行中です。今も変化し続ける萩焼の有り様を注視する、現代ならではの鑑賞の楽しみ方かもしれません。

(当館学芸員 市来真澄)



1. 十二代坂倉新兵衛《萩刷毛目茶碗》1958年



2. 三輪休和(十代三輪休雪)《萩編笠水指》1973年

# SCHEDULE 令和6年度(1月~3月)

■ 休館日 ★ イベント ◆ ギャラリートーク

1 JAN	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	展示室1~6																														
	特選鑑賞室 設備改修工事のため、本館休館 (~3/31)																														
	茶室																														
	展示室7 東洋陶磁・陶芸・工芸 萩美百華(1/2~4/13)																														
展示室8 東洋陶磁・陶芸 茶陶 萩(1/2~4/13) 浮世絵 美人画の四季(⑦1/2~1/26) ※1																															

2 FEB	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28			
	展示室1~6																														
	特選鑑賞室 設備改修工事のため、本館休館 (~3/31)																														
	茶室																														
	展示室7 東洋陶磁・陶芸・工芸 萩美百華(~4/13)																														
展示室8 東洋陶磁・陶芸 茶陶 萩(~4/13) 浮世絵 美人画の四季(⑧1/28~3/5)																															

3 MAR	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	展示室1~6																														
	特選鑑賞室 設備改修工事のため、本館休館 (~3/31)																														
	茶室																														
	展示室7 東洋陶磁・陶芸・工芸 萩美百華(~4/13)																														
展示室8 ※2 東洋陶磁・陶芸 茶陶 萩(~4/13) 浮世絵 美人画の四季(⑨3/14~4/13)																															

※1-2 美人画の四季(⑧1/28~3/5)  
 ※ 令和6年度は茶室でのインスタレーション展示はございません。  
 ※ 本館休館中(令和6年7月~令和7年3月)は特選鑑賞室での展示はございません。

## ★ イベント

お正月は美術館へ行こう!

### ①和太鼓演奏

【日時】1月2日[木] 10:00~10:30

【出演】大板山たたら太鼓同好会

【会場】玄関前広場

### ②ちよるとお正月

【日時】1月2日[木] 9:30~、11:00~、

14:00~(各回20分)

【会場】エントランスロビー

### ③山口県の伝統工芸に親しむ ワークショップ

赤間硝と徳地和紙で筆あそび

【日時】1月2日[木] 10:30~、11:30~、

13:30~、14:30~(各回30分)

【講師】日枝美穂(書家)

【会場】交流スペース

【定員】各回8名(予約優先、要当日

の展覧会観覧券)

※予約はWEBで12月7日(土)

から12月26日(木)まで受付

### ④20歳と巳年生まれの方は入場無料

【日時】1月2日[木]~13日[月・祝]

### ⑤記念撮影用フォトスポットを設置

【日時】1月2日[木]~13日[月・祝]

### ⑥アート年賀状2025の作品展示

【日時】1月2日[木]~26日[日]

## ◆ ギャラリートーク

(担当芸員による展示作品解説)

いずれも11:00~(30分程度)

◆ 1月11日[土]美人画の四季⑦

◆ 1月25日[土]茶陶 萩

◆ 2月 8日[土]美人画の四季⑧

◆ 2月22日[土]萩美百華

◆ 3月22日[土]茶陶 萩

※ギャラリートークへのご参加には観覧券が

必要です。

臨時の休館やイベントを中止・  
変更する場合があります。

詳しくは当館ホームページを  
ご覧ください。

URL <https://hum-web.jp/>



公式HP

## 表紙について

林 康夫《寓舎「重い屋根」》2006年 令和6年度新収蔵作品

林 康夫(1928-)は京都の陶芸家の次男として生まれ、現在でも同地で活動している。1940年に日本画を志して美術学校へ入学するが、第二次世界大戦中の1943年は海軍航空隊へ入隊。復員後の1946年より父のもとで陶芸を始める。本作品は家のような形をした作品《寓舎》シリーズのひとつで、「人間如何にして生きるか」をテーマに制作されたものである。作品には、錯視的な効果をねらった独自の手法が使われ、黒化粧・加彩・施釉により三次元の世界と二次元の世界が交錯する。

## 交通アクセス

### 【新山口駅から】

■ 直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で

萩・明倫センター下車、徒歩約5分

■ 防長バス(約90分)で

萩バスセンター下車、徒歩約12分

### 【山口宇部空港から】[萩・石見空港から]

■ 萩近鉄タクシー(乗合タクシー)

約70~80分(利用前日までに要予約)

### 【JR山陰本線】

■ JR 萩駅からタクシー約7分

■ JR 東萩駅から萩循環まあるバス(西回り)約20分

■ JR 玉江駅から徒歩約20分

### 【自動車】

■ 「中国自動車道」美祿東JCT経由、

「小郡萩道路」絵堂ICから約20分

■ 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



最新情報は公式SNSで